

平成6年度

地域畜産状況レポートNo.6

社団法人 熊本県畜産会

# あか牛の経済性に感謝する

阿蘇郡白水村吉田 後藤善雄 氏

阿蘇山は、世界一の火山。

阿蘇山と南外輪山に囲まれ、風がささやき鳥が歌う、水のふるさと  
白水村は熊本市東方45kmの距離。

日本の名水、白川水源の伏流水は毎分60tを湧出している。

そのすぐ近くに**後藤牧場**はある。



牛舎・自宅全景 新設牛舎は後方屋根のみ

## 経産牛肥育で基礎をつくる

後藤氏は、昭和40年に就農。同時に肥育をはじめた。それまでは、水田1ha、陸稲2ha、あか牛5~6頭、馬2頭の複合経営であった。翌昭和41年、肥育牛舎(24頭)建設のため父名義で200万円を借りてもらった。

昭和44年 結婚(22才)。昭和46年 肥育牛舎(27頭)を自己資金(250万円)で建設。肥育は半分が2~3産で種のつかない経産牛であったが、これがけっこううかつた。当時はめずらしかったが、経産牛肥育は6~8ヶ月で出荷することができ、そのうえ一般の肥育牛よりも高く売れた時代もあった。例えば、出荷時体重750kg、枝肉430kg、枝肉単価1,500円。しかし、平成2年の牛肉自由化が決まってから売値も急落し、当時いた経産牛30頭は素牛代相当の販売となり、餌代等実質的には、1,000万円の損となったが、その間の25年、後藤牧場は、あか牛の経産牛肥育で基礎ができたといえる。

## 石油ショック、自己資金でのりきる

昭和48年は、石油ショック、肥育牛も暴落した。当牧場も50～60頭の肥育牛がいたがこれも素牛代相当での販売となり、当時も1,000万円ほどの損をされている。これも、経産牛肥育での蓄<sup>たくは</sup>で、新に借金することなく、のりきってこられた。

当時は、現在の住宅(79坪の豪邸)を自己資金で建築中であつたが、これは一年延期せざるをえなかつた。もし、もう一年このショックが続き、1,000万円のもちだしとなつていたら、肥育経営は止めていただろうと振り返られた。

それでも昭和51年 20頭規模(300万円)、昭和59年 20頭規模(450万円)、昭和60年 13頭規模(100万円)とつぎつぎに自己資金で畜舎を建設、そのつど、20～25頭づつ増頭してこられた。

それからさらに驚くことに、平成5年には、長男秀幸氏(東海大学畜産科3年在学中)の跡継<sup>あとつぎ</sup>を確認し、100頭規模(5,000万円)を自己資金で増設されている。

飼料畑は水田との交換もあつたが、現在5haも所有。

## 素牛は健康な牛を選ぶ

素牛導入の基準は、一般的にサシのはいる血統<sup>ちまなこ</sup>を血眼<sup>さか</sup>になつて捜すが、当牧場は健康な牛を基準にしている。肥育期間は13.5～14ヶ月。予定の月令がくれば、かならず出荷。できそこないの牛は、いつまでおいてもつまらないのですべて一括して出荷する。

濃厚飼料は、流通配合飼料30%を基本に単味飼料70%を自家配合しての給与。この内容はもう5～6年間続けている。出荷前といえども、餌に特別な工夫はしていない。ただ、前期・中期・後期と給与量を加減するだけである。

出荷前の2ヶ月間は、ひまなときだけ食い残しぶんをはわき寄せるだけ。食べ残しがあれば、すべて若牛に食べさせる。

牛舎のスペース6㎡は絶対必要で、これ以上狭くするとくず牛がやすい。ゆつたりさせることが一番である。病気はたまに導入直後、かぜにかかりやすいが、大きくなれば他の病気がでることもある。

現在の頭数は200頭(すべて自己資金)。出荷予定は160～170頭、枝肉単価は1,550円、A4以上50%、A337%あか牛の経済性に感謝しなければならない。

平成6年の売上げは150頭、1億1,000万円。

## 敷料は12日で交換

敷料のノコズは12日間で交換している。インバーター付扇風機も取り付けているが、これは30年間続けているから苦にならない。いつも敷料をきれいにしておくのと、牛が汚れない。また病気もでない。敷料のノコズ代は月間300,000円。堆肥はイナワラと交換するため配達している。20ha分のイナワラをいただいているが、最近牛が200頭になり、やや不足するためすこしイタリアンストローを買っている。

粗飼料は、南阿蘇畜協所有の採草地から譲ってもらっているが、乾草調整は自分達です。適期刈りと何度も反転乾燥<sup>かんそう</sup>するため、きわめて良質の乾草がとれる。これが、肥育初期の本当の勝負になる。



父 春雄氏 長男 秀幸氏



出荷前 残した餌をよせる

## 高台の新設牛舎は快適<sup>かいてき</sup>

平成5年7月100頭規模の畜舎と、堆肥舎(振興資金1,100万円)を新設されたが、とにかく涼しい。夏でも34℃は上がらない。しかし、古い牛舎は、組合有の払い下げ<sup>ようざん</sup>小屋の解体材を使っていたこともあり、天井が低く、風通しが悪い。24時間扇風機をまわしていても、40℃までになる。去勢の肥育中期以降を繋<sup>つなぎ</sup>でつめこむこともできるが、当然肉質もおちる。

一日の作業は、AM7~8:30、PM3:30~5:00(夏は朝が1時間早く、夕方1時間遅い)。その他牛の観察はいつもかかさない。当然のことであるがすべての牛が名水白水を飲んでいる。

## もうけるときはしんぼうする

牛肉の相場の変動は激しい。ぼろもうけすることもある。そのとき、殆どの人が、車を買ったり、家を建て、使ってしまった。酒を飲む機会もふえる。はめをはずすこともある。あるいは『女』にうつつをぬかす人もいるかもしれないし、話は『女』のことばかりである。いずれにしても、もうかるときは殆ど経営の話はない。逆に相場が下り、損をしたとき、その試練をのりこえることができない。これが一般的である。

もうかっているときほど、しんぼうしておれば、成績はひとなみであつても経営は順調にいく。相場が下り、苦しいときは、なるべく酒を飲む機会を作ることである。このときははでな飲み方をしない、質素である。ただちがうのは、そのときの話は、いかにしたらよいかという経営（畜産）の話ばかりである。これが、次の飛躍につながる。貸付金で牛を導入すれば、金利・手数料で約8%。仮に100頭、4,000万円とすれば年間320万円になる。これが10年続けば3,200万円。逆に、ちょっとした頑張りが巨額の蓄えとなる。



新設牛舎 100頭規模

## 後継者に責任をもたせたい

当牧場は長男秀幸氏が後を継ぐといたので、規模を拡大された。現在、大学に通学しながら自らの『牛』を30頭もっている。A5に売れるときもある。はやく一人だちできるように経営を覚えさせたい。いつまでも親に頼るくせをつけると駄目。たよるくせは、経営がいきづまったとき、かんたんに組合の金に頼るようになる。浮き沈みの大きい肥育経営には、不屈の精神が必要である。ご主人も30才から、経営のすべてをまかされたとか。

『夢』はもつと働いて、奥さんと一緒に海外旅行に行くこと。